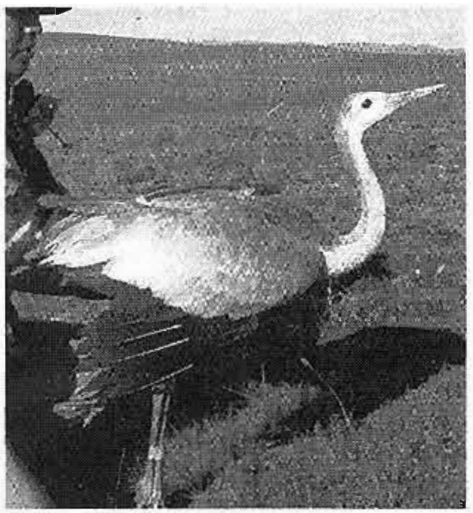
今月の話題

モンゴルのマナヅルを追跡

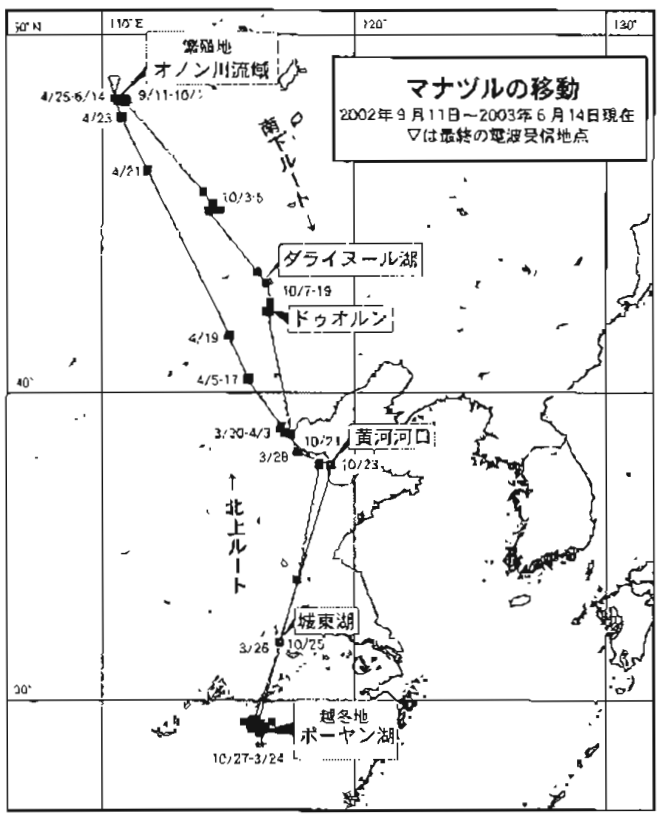
発信機を背中に装着したマナヅルの若鳥。（モンゴル・オノン川流域で）



昨秋から今春にかけて、モンゴルで繁殖するマナヅルを人工衛星で追跡する調査が実施され、繁殖地と越冬地間の往復の渡りを追跡することに成功しました。モンゴルに生息するマナヅルの越冬地が実証されたのは始めてで、希少なマナヅルの保護や生息地の保全などに役立つ基礎的な生態の一端がわかりました。この研究は文部科学省科学研究費補助を受けた「希少鳥類の生存と回復に関する研究」の一環で実施しました。

マナヅルは中国東北部、ロシア、モンゴルで繁殖し、鹿児島県出水市や中国の揚子江中流域、朝鮮半島で越冬する、東アジアにのみ生息する鳥です。出水市には毎年2,000羽あまりが飛来しますが、世界的には個体数が少なく、環境省のレッドリストでは絶滅危惧II類に指定されています。

2002年9月6～11日、モンゴルの研究者と共同で、尾崎清明標識研究室長と百瀬邦和研究員が、マナヅルの繁殖地、モンゴル北西部のオノン川流域で3羽に人工衛星用発信機を装着しました。その後、繁殖地に9月下旬まで滞在し、うち1羽が10月2日に渡りを開始。中国ダライヌール湖、ドゥオルン、黄河河口、城東湖などを経由して、10月27日に越冬地の中国南部ポーヤン湖に到着しました。繁殖地から越冬地までの所要日数は25日間で、移動距離は2,366Kmでした。この鳥は2003年3月22日までポーヤン湖で越冬したのち北上をはじめ、南下とほぼ同様のコースをとって、生れ故郷のモンゴルに4月25日に到着しました。所要日数は34日間でした(右図)。



これまでに日本野鳥の会と山階鳥研などが実施した同様の調査で、ロシアや中国東北部で繁殖する個体が出水市やポーヤン湖で越冬することが実証されていますが、モンゴルのマナヅルの越冬地が確認されたことや、同一個体の往復の渡りを追跡できたのは初めてです。マナヅルは国境を越えて渡りをするため、足環などの個体識別で繁殖地、中継地、越冬地の総合的な生息域を把握することは困難でしたが、人工衛星で追跡する手法により、総合的な生息域が徐々に解明されています。

また、越冬期の追跡では、給餌を行っている出水市ではほとんど移動しないナベヅルが、ポーヤン湖周辺では移動範囲が50 Kmにも及ぶことがわかりました。尾崎室長はポーヤン湖周辺では、自然環境下で餌を採ることや、湖の水位の変動により餌場を移動しなくてはならないので、行動圏が広範囲に及ぶのではないかと推測しています。